つどい

第446号
2025.12.1

発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

古墳時代における葬制の変遷
―古墳出現期からその消滅まで―

広島大学考古学研究室 准教授 上田 直弥

はじめに

古墳時代は三世紀半ばから六世紀、終末期を入れると七世紀まで、およそ三五〇年間の長きにわたっている。前方後円形という上位層のシンボルが継続しながらも、その中に築かれる埋葬施設の種類が時期ごとに変化することは周知のとおりである。それは単なる習俗の変化ということ以上に、政治的背景を持つ社会現象として積極的意味を見出すことが可能で、その変遷を通時的にみることで古墳時代における儀礼管理戦略の一端を復元することが可能である。以下古墳時代の開始からその終わりまで、葬制の変化過程とその背景を整理していきたい。

第一章 古墳時代前期

木槨・竪穴式石室 前方後円墳の出現より以前、弥生時代の特に後半期からは、西日本を中心に墳丘墓が発達を始める。その後、規模などで大きな飛躍を経て古墳時代的墓制へと移行していくが、その移行期に大型墳丘墓の埋葬施設として大きな位置を占めていたのが木槨である。

木槨とは、各種木棺の外側に、もう一重の木材や礫石などを用いて囲いを構築した埋葬施設である。平面プランや、木棺を据え置く基底部分の様相などによって大きく三つに分けられている（岡林二〇一八）。A類（木槨状施設）は狭長で、側板設置後の槨底面整備を行わないものである。弥生時代中期を主とし、のちの木槨とつながるものではない。B類は幅広かつ槨底面整備（平坦）を行うもので、弥生時代後期後半に出現する。中国地方を中心として分布し、本格的な木槨の出現として評価されている。例としては岡山県楯築墳丘墓がある。C類は幅広の平面プランを持つもののうち槨底面整備（舟底状）を行うもので、裏込め礫

古墳時代における葬制の変遷
―古墳出現期からその消滅まで― 上田 直弥
織姫伝承と古墳の町・池田を訪ねて
岡本 浩二